



■ 臺股彫刻工程

2018年11月から2019年2月まで、青森県にて出張しての仕事してきました。

それについて彫刻工程を画像を参照しながら説明します。

今回の仕事は、お寺の部材の1つである臺股に十二支を彫るというものです。臺股というのは、社寺建築で柱の頂部をつなぐ頭貫(かしらぬき)と軒下の桁(けた)との間や、梁(はり)上に置かれる部材。カエルが股(また)を開いたような形をしているのでこの名がある。古代の臺股は一木の厚い板でつくられ、梁の上に置かれて上の材料を受ける構造材であったが、平安時代後期から頭貫と桁の間にも入れられ、装飾化する。このときから輪郭を左右対称に2本の木でつくられたが、やがて一木をくりぬいてつくられるようになり、内部に飾りとして唐草が入られる。中世になると内部の飾りが多様になり、近世になると動植物が彫刻されて華麗になる。厚板だけのものを板臺股、内部をくりぬいたものを本臺股といいます。

では十二支の中から龍を例に彫刻工程を説明します。

図案作成をした後、図案を材料に写します。

彫刻する部分を残して、不要な部分を機械で取ります。(画像A参照)

顔、前足、尾、雲など大まかな形を彫り出します。(画像B参照)



角や火炎、背びれなどより詳細なパーツを彫り出します。(画像C参照)

鱗など表面の細かな仕上げをして完成します。(画像D参照)

今回の仕事で注意したことは、丸めすぎないこと、厚みをとりすぎないことです。

取り付けられると人の目線よりも高い位置にあり、見上げる状態になります。

例えば何も持っていない側の前足や図案の理屈上で奥に位置する角などを不要に取り過ぎると、かえってつながりが崩れてしまいます。この場合、前足であれば胴体と前足の境目のみにしっかりとした段差をつくり、爪や指の部分はあまり掘り下げないようにします。

角も同様に頭や背びれとの境目に段差をつくり、先端や途中で枝分かれしている部分は手前側にくる角より少しだけ低いくらいに残しておきます。



彫刻家 牧 芳彦
1980年 愛知県西尾市生まれ、同市在住
1999年 富山県南砺市(旧 福野町)にて彫刻家・善本秀作氏に師事
2007年 8年半の修業期間を終えて独立
受賞歴
2009年 第16回公募展木彫フォークアート・おおや グランプリ(秘密基地)
2010年 第17回公募展木彫フォークアート・おおや 入選
// 2010津別ウッドクラフト展 優秀賞
2011年 第18回公募展木彫フォークアート・おおや 入選
// 2011津別ウッドクラフト展 優秀賞
2013年 第13回G・A・M展 外務大臣賞 (ボクの家) 展示歴
2010年 招福 トラ×ねこ展 (ギャラリー彩・名古屋)
2013年 創彫展 (三越・札幌)
// アニマルパーク (三越・日本橋本店)
// 伝統のありか(西検番事務所・金沢)

2014年 Art zoo 不思議で楽しい動物たち (ギャラリー彩・名古屋)
// Christmas Art Competition in Yokohama (横浜赤レンガ倉庫)
2015年 NEO JAPONISM in TAHITI (タヒチ)
// 第23回国際平和美術展 (横浜・イタリア)
// JAPAN ARTS&CRAFTS IN PRAGUE (チェコ)
// 小品展 GIFT (THE BLUE-BOX GALLERY・岡崎)
2016年 スプリング展 (THE BLUE-BOX GALLERY・岡崎)
// 漱石と日本の21世紀美術展(愛媛県美術館)
// Piece of Art (THE BLUE-BOX GALLERY・岡崎)
2017年 第20回創春会展(ギャラリー彩・名古屋)
// 牧芳彦 木彫展「物語」(art gallery OPPO・東京)
// サマーズ展 (THE BLUE-BOX GALLERY・岡崎)